

大平正芳記念財団レポート

第40回「大平正芳記念賞」・第38回「学術研究助成費」

第40回 大平正芳記念賞 贈呈式 第38回 学術研究助成費



令和6年6月12日（水）、財団合同役員会のあと正午から、100名の参加者のなか「第40回大平正芳記念賞」「第38回環太平洋学術研究助成費」の授賞式が東京・ホテル・グランドヒル市ヶ谷で行われました。

授賞式は、末廣昭・運営選定委員長より選考の過程の説明と選評があり、「大平正芳記念賞」を緒方宏海様（香川大学教授）ほか5名の方に、「環太平洋学術研究助成費」を影山優華様（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科）に授与されました。授賞者を代表しての謝辞は高橋力也様（横浜市立大学准教授）が述べられました。続いて、川島真先生（東京大学教授）にご講演をいただき、大平総理の母校・観音寺第一高校小山圭二校長よりご挨拶をいただきました。その後、平将明議員の挨拶と乾杯のあとパーティに移り、各授賞者を交えて歓談に入り、盛況裡に午後2時過ぎお開きとなりました。

2024（令和6）年 9月発行

2024年 授賞式における理事長挨拶

2024年6月12日

本日は、ご多忙の中、ご出席をいただき、誠にありがとうございます。ここに、厚く御礼申し上げます。

この授賞式も遂に40回という節目を迎えましたが、これも本日までご出席いただきました皆様を始め、多くの方々のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

本日お配りした「40年のあゆみ」にもありますとおり、当財団は、内外の若手研究者、学者の方々306名に記念賞・学術助成費として総額3億円強を授与し、若い方々を中心に学会等への登竜門としての役割を果たしてまいりました。また、本年3月には、『大平正芳とその政治 再論』に続いて、本日までご臨席賜っております東京大学大学院・川島^{かわしま}真^{しん}教授、慶應義塾大学・井上^{いのうえ}正也^{まさや}教授に編著をいただきました『大平正芳の中国・東アジア外交』を発刊し、産経新聞などの書評にても取り上げていただいております。小さい財団ではございますが、大平正芳の顕彰に努め、大平正芳の残した政治思想や哲学の普及に努めてまいります。

尚、本日は、『大平正芳の中国・東アジア外交』の編著者を代表いたしまして東京大学大学院の川島真教授に記念スピーチをお願いいたしております。ご著書に加え、最近の東アジア情勢などをお話いただけるものと期待いたしております。

これより、「大平正芳記念賞」及び「環太平洋学術研究助成費」の授賞式を行わせていただきますが、本年度もまた非常

大平正芳記念賞 学術研究助成費



に充実した内容の賞になったものと考えております。引き続き、末廣^{すえひろ}昭^{あきら}委員長よりご紹介がございますが、受賞されます方々の多年のご研鑽に敬意を表したいと存じます。

以上、簡単ではございますが、皆様には、当財団への変わらぬご指導・ご鞭撻をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

2023年度、第40回大平正芳記念賞の 選考結果について

運営・選定委員会委員長 末廣 昭

大平正芳記念賞 学術研究助成費



2023年度(令和5年)の第40回大平正芳記念賞は、自薦他薦合わせて計28点の本が寄せられ、2023年10月から2024年1月までの計4回の選定委員会における厳正な検討の結果、後述する5点に決定した。また、第38回環太平洋学術研究助成費も決定した。

今回の受賞作は、国境にある7万人の人が住む島からみた中国社会論、「普通の国」マレーシアのユニークな政治経済

論、タイのプーミポン国王に対する国民の敬愛の秘密を探る論稿、両大戦間期の国際法法典化作業に果たした日本政府と法律家の役割に関する重厚な分析、そして、大平・鈴木・中曾根時代の「総合安全保障」の概念と日米関係の分析と、多彩なラインアップとなった。また、学術研究助成の対象となった影山氏の研究企画は、「軍事・国家・男性中心」から「平和・社会・女性中心」へと安全保障の視座転換を模索する内容であり、新しい環太平洋連帯を目指す研究計画となっている。大平正芳記念賞にふさわしい優れた作品を刊行された著者のみなさんと出版社の方々に、心より敬意を表したい。なお、選考に携わった委員は次の7名である。

末廣 昭(委員長、東京大学名誉教授)、総括、東南アジア経済
青山和佳(東京大学教授)、文化人類学、宗教社会学、東南アジア社会

金子芳樹(獨協大学教授)、国際政治、東南アジア政治

川島 真(東京大学教授)、アジア外交、中国・台湾

木村福成(2024年4月より慶應義塾大学経済学部シニア教授、日本貿易振興機構アジア経済研究所所長)、国際経済、アジア太平洋地域の経済

久保文明(防衛大学校校長)、アメリカ政治、日米関係

黒崎 卓(一橋大学教授)、開発経済学、南アジア経済

以下、授賞作5点と学術研究助成1件について、その作品の意義と授賞理由について簡単に紹介をさせていただく。

~~~~~

**緒方宏海『辺境からの中国——黄海島嶼漁民の民族誌』(風響社、2023年)**

中国といえば広大な大陸であり、中国社会は大陸文化の賜物と人々は考える。これに対して本書は、「黄海にある長山諸島——遼東半島の東側に位置し、195の大小の島からなり、18の有人島に7万人弱が暮らす中国で唯一の「島嶼国境界」

---

——から、巨大な中国を俯瞰する」という大胆な目的を掲げる。その意味で大変野心的な民族誌であるが、その野心に応えるだけの出来栄えとなっている。本書の前半で筆者は、清朝の崩壊、帝政ロシアや日本の関東州の統治支配、中華人民共和国の成立という、島を襲った度重なる政治体制の変化を跡付ける。一方、後半では、人類学的視座から人々の暮らしや地域政治に着目した相互行為秩序を丁寧に描きだす。とくに、中国社会の特徴とされてきた費孝通（フェイ・シアウトン）の「差序格局モデル」= ego-centric な同心円モデルを批判し、長山諸島では、個人が自分の幸福実現のために主体的に社会関係を選択するようになったという指摘は重要である。本書は漁民である島の人々の生活を軸に、経済発展と文化変容を扱った優れた作品であり、中国の近現代史としても、民族誌としても面白く読める点で、後続の研究者にインパクトを与える、大平正芳記念賞にふさわしい作品であると確信した。

~~~~~

熊谷 聡・中村正志『マレーシアに学ぶ経済発展戦略——「中所得国の罣」を克服するヒント』(作品社、2023年)

日本ではマレーシアは多民族社会の国として、またブミプトラ政策（マレー人優遇政策）を実施してきた国として知られてきた。つまり、日本人にとってマレーシアはきわめて異質な国であった。しかし、世界の新興国・発展途上国の大半は、日本などと違って民族の多様性を抱えている。国際的にみれば「普通の国」がいま、世界で初めて高所得国の仲間入りを果たそうとしている。その経済発展のプロセスを、経済構造と政治体制の2つの側面から描き出すことで、他の新興国・発展途上国が採るべき開発戦略のヒントを提供しようというのが本書の目的である。従来のマレーシア経済論は、マハティール政権の新経済政策(NEP) など、経済政策の推移をなぞる形で記述してきた。これに対して、本書は都市化、産業構造の高度化、「中所得国の罣」からの脱却など、主要テーマ

ごとに分析を行っており、競争的権威主義が経済政策の転換に与えた影響の分析と共に、ユニークなマレーシア政治経済論となっている。また、開発経済学の成果と緻密な現実の観察を統合している点で、新しい東南アジア政治経済論を提示するものとして、大平正芳記念賞に値するものと考えた。

~~~~~

**櫻田智恵『国王奉迎のタイ現代史——プーミポンの行幸とその映画』(ミネルヴァ書房、2023年)**

タイでは国王抜きにその政治や社会を語ることはできないが、国王の役割を露骨に議論することは長くタブー視されてきた。ところが、ここ15年間に特にプーミポン国王に関する分析が多数出るようになった。ただし、こうした分析はその大半が、国王の政治的権威の形成メカニズムに関心を向けしており、なぜ、タイの国民がかくもプーミポン国王を敬愛するようになったのか、そのメカニズムを解明していない。本書は国王と政治家、国王と軍の関係ではなく、国王と民衆の関係の関係を正面から論じたパイオニア的な本である。この点を論証するために、筆者は、第一に、1950年から67年まで制作され、国王自ら企画と編集に携わった「陛下の映画」を題材に、これらの映画が地方で上映されるプロセスを詳細に分析した。第二に、1969年から1991年までの国王の地方行幸（多い時は1年に156回に及ぶ）を、一次資料を使って目的別に分析する。そうした分析を通じて、きめの細かい準備と地方官吏や民衆との直接の交流が、国民の間に国王を敬愛する心を醸成してきた過程を説得的に描き出した。傑出した研究成果であり、大平正芳記念賞にふさわしいと判断した。

~~~~~

高橋力也『国際法を編む——国際連盟の法典化事業と日本』(名古屋大学出版会、2023年)

第一次大戦後の20年間は、外交研究者の間では「条約に明け暮れた時代」と言われてきた。その典型をなすのが、国際連盟が1920年代から30年代前半にかけて実施してきた国際

法の法典化作業である。その法典化作業に、欧米の大国だけでなく、ギリシャ、ベルギーのような小国や日本のような後発国が果たした役割を、国際連盟文書や各国の外交文書を含む膨大な史料を読み解いて明らかにした、文字通りの「大作」である。本書の特徴は多々あるが、特筆すべきは、(1)両大戦間期の国際連盟の法典化作業の全容を解明したこと、(2)国際法秩序形成に日本が受け身ではなく積極的に参画し、一定の役割を果たしたことを実証したこと、(3)外交に占める個々の法律家の役割を浮き彫りにしたこと、以上の3点である。とりわけ本書は、「国益を左右する真の外交とは、軍縮会議のような大国間の外交会議や二国間外交である」という従来の見方への強い批判を内包し、「平素の準備工作によって突発事件の発生を未然に防止する」、そうした準備外交の重要性を指摘する。本書は、従来日本の外交観に再考を迫るパイオニア的著作であり、大平正芳記念賞にふさわしい作品であると同判断した。

~~~~~

### 山口航『冷戦終焉期の日米関係——分化する総合安全保障』 (吉川弘文館、2023年)

本書は、大平正芳、鈴木善幸、中曽根康弘が首相をつとめた時代の日米関係を、当時盛んに使われた「総合安全保障」という概念を手掛かりに分析した作品である。「総合安全保障」には2つの捉え方がある。一つ目は、狭義の軍事面だけでなく、経済面や食糧面での安全保障を加えた「多様性」に注目する安全保障論で、これを「要素還元主義的総合安全保障論」と呼ぶ。これに対して、「多様性」に安全保障の「多層性」(自国レベル、同盟関係レベル、国際環境レベル)を加味して見ようとする立場が「ホロニックな総合安全保障論」である。「ホロニック」とはコンピュータ用語で、安全保障を構成する要素が自律的でありながら、相互に協力的な関係にある状況を指し、ヒエラルキー的関係の対極にある概念である。本書は日本政府、米国政府、外務省の三者が「総合安全保障」をどう捉

え、どう受容していったのかを克明に跡付けていく。本来きわめて多義的である総合安全保障論を正面から取り上げ、それを軸にして安全保障をめぐる日本政府の立場や日米関係の展開を深く分析した本書は、現在の安保論議にも一石を投ずる重要な業績であると判断した。

### 第38回環太平洋学術研究助成費

#### 影山優華『アジア太平洋におけるインクルーシブな安全保障共同体の構築——フェミニスト平和運動のトランスローカルな連帯実践の事例から』

今回は環太平洋学術研究助成に対して3つの申請がなされたが、環太平洋連帯構想を新しい視点から捉えようとする影山氏の研究計画を満場一致で採択した。影山氏によると、従来の安全保障に関するアプローチは、「軍事・国家・男性中心」であった。これに対して、氏は「平和・社会の弱者・女性中心」の視点に立つ安全保障共同体の構築を提唱する。そのために、氏が選んだのは、アジア太平洋の米軍駐屯基地で働く女性や研究者たちで作る「軍国主義を許さない国際助成ネットワーク」(IWNAM)の活動である。IWNAMは日本、沖縄、米国、韓国、フィリピン、プエルトリコ、グアム、ハワイをカバーし、グアムなど島嶼部の基地が含まれている点が大きな特徴である。アジア太平洋を囲むそれぞれの国やコミュニティの歴史・政治・経済・文化の違いを十分考慮した「インクルーシブな安全保障共同体」の模索は、近年軍事的観点からする「国家安全保障論」がますます強調されるなか、「人間の安全保障論」の意義を問い直す試みともなる。その点、本研究は環太平洋学術研究助成の目的に相応しい研究テーマであり、全員一致で研究助成を決定した。

---

## 川島真先生のご挨拶

今回の第40回大平正芳記念賞、第38回環太平洋学術研究助成費の受賞、おめでとうございます。すでに末廣先生からご紹介がございましたが、私も選考委員として選考に加わりまして、受賞された著作それぞれの方法論や学問的な視角からは非常に多くのメッセージを読み取ることができたと思っております。緒方先生の本からは、ミクロな視点から全体を見るということ、それも中国の国境にある島から、広く長い歴史を見るという斬新な方法でした。熊谷先生・中村先生のご著作からは、足を使う研究が多いアジア研究の領域において、政治学・経済学・ディシプリンをどう引きつけるのかということにチャレンジされる挑戦的なものでした。櫻田先生の著作は、プーミポン国王の行幸と映画を組み合わせるという切り口を提示し、文献研究では辿り着けない視点を提示しました。また、高橋先生の著作は、資料を大量に渉猟した上で、これまでの異なる視角から新たな歴史観を提示しました。これは講評に記したとおりです。山口先生のご論考は、単に資料を集めるだけではなく、歴史研究と現代的課題の間の難しいバランスの上で記された素晴らしい著作であったと思います。影山先生のご研究については、今後の成果をお待ちしたいと思います。

本日、選定委員でありながら、来賓としてここでお話しさせていただくのは、大平正芳記念財団からの助成を受けて、今般、『大平正芳の中国・東アジア外交』という編著を、ご在席の慶應義塾大学・井上正也先生とともに出版したためと考えております。ご臨席の渡辺利夫先生の新聞書評もごさいますが、著作の内容と昨今の状況について、お話ができればと思っております。

私自身は、中国の外交の歴史を勉強しております。いまか



ら150年前の清王朝、民国の時代の手書きの清王朝、中国の外交文書を読み解き、中国の外交の現場にいた人たちが何を考えてやってきたのかということ考察してきました。そうした観点からも、日中関係に深く関与した大平正芳という人物に関心を持っておりましたが、大平外交、とりわけその東アジア外交について論文集を編もうという時に、中国外交史を専門とする私だけで編むことはできません。そこで、日本外交史がご専門で、日中国交正常化等に関する大変優れたご研究をされている井上正也先生にもともに編集を行うことをお願いしたという経緯がございます。

この本の序章で井上先生が書かれているように、大平正芳研究については、昨今、憲法規範と日米安保体制を両立させていこうという「保守本流」の政治思想から注目されている面と、大平正芳自身の人物研究の基礎となる伝記・編纂等もあるとは言え、まだまだ多くの課題が残っているということがございます。

一つの大きな課題は、思想と政策との連関です。大平正芳の環太平洋連帯構想であるとか、さまざまな外交思想について多くの研究が進んではおりますが、その思想や考えがどのように政策それ自体に結びついたのかという点が未だ十分

---

に解明されていない面があります。

二点目の課題は、研究の偏りの克服です。日本政治外交史研究は、どちらかといえば欧米との関係が主に研究されてきました。そのため、大平についても、その中国・韓国・台湾、或いはその他のアジアに対する外交の研究が手薄でした。もちろん、日韓国交正常化交渉や日中国交正常化交渉についての研究は蓄積されてきました、それ以外の時期・地域については、十分な研究が十分ではありません。これらの課題を踏まえて今回、執筆者を集めて論文集を編纂したわけでございます。中国や韓国、台湾に焦点を当てつつ東南アジアにも視野を広げて、論文集が編纂されています。そこでわかったことは、大平が韓国との日韓交渉において、どのタイミングでどういうアイデアを出していくのかということや、日華(日台)関係が1964年に断交の危機に直面した時、大平が外相としてその危機を回避するために蒋介石との間でどのようなやりとりをしたのかといったことです。大平の台湾訪問を契機として、その陰悪な雰囲気収まりを見せただけでなく、その後日本と中華民国の関係は大きく転換しました。大平は非常に現実的な外交を行い、それまでの「以德報怨」(徳をもって怨みに報いる)を乗り越えた経済に基づく日台関係を想定しました。また、1960年~1970年代という東アジアの冷戦の大きな転換期において、日米安保を軸にしながら、日本の経済力を使って、経済を軸にアジアとの関係をつくるスタイルを構築し、それがその後の日本の外交を規定した面があるのだと思います。

しかしながら、この時代に大平が提示し、その後も引き継がれた、この日本外交のスタイルが、昨今はいまうまいかなくなっているのかもしれない、とも思うのです。日米安保を軸とするということについては、いかに憲法と日米安保体制を両立させていくのかという問題はあっても、およそ

合意が形成できると思います。しかし、もう片方の経済を軸とするアジア外交が難しくなっています。それはなぜでしょう。一つには中国の台頭があります。中国自身の存在が極めて大きくなり、いまや中国の GDP は日本の3倍を超えています。そうしますと日本が経済をテコに外交を展開することは極めて難しくなっています。また経済安保の問題が出てくると、以前のように政治と経済とを分ける政経分離が難しくなります。どんなに政治が悪くても経済を良くしていこうという「政冷経熱」が小泉政権にありましたが、これは政経分離ができたからこそできたことです。これが現在は難しくなっていると思います。

また、二つ目に、1989年の冷戦の終結以降、ロシアの脅威は一旦下がりましたが、ウクライナ戦争の影響もあって、中国・ロシア・北朝鮮という三つの核保有国に日本が囲まれる状況になっております。そのようなプレッシャーのなかで、どのような安保体制をつくっていくのか、これが「安保三文書」にも反映されたわけでございます。

三つ目に最も重要なことは、中国自身がいわば、西側先進国の牽引してきたような世界の秩序に対して挑戦的な姿勢を見せていることです。胡錦濤のときには、西側の秩序を基本的に肯定した上で、その秩序を途上国の視点で修正していくとしていました。あくまでもルールは西側がつくるのだが、中国が修正していく、ということでした。しかし、習近平は違って、西側先進国のルール、秩序は基本的に間違っている、時代遅れだと言いついたわけですが、中国が言っている秩序なりルールなりはまだ未成熟ではありますが、それでも中国は既存の西側主導の秩序に挑戦してきたわけです。加えて2049年には中国が国際舞台の中心に躍り出る、すなわち、事実上、アメリカに追いつき追い越すと宣言したのです。同時に、2049年には中華民族としての偉大なる復

---

興の夢を実現するとも習近平は言っています。従来、台湾統一という言葉には「民族の夢」が枕詞としてついていますので、自ずから台湾統一のゴールを2049年に設定したと言えるわけです。また、2049年までの道程を設定した上で2035年を中間目標展としました。この中間ポイントまで習近平自身が政治・外交を見ていくつもりなのかもしれません。

いま申し上げた大きな三つの論点を踏まえますと、このような新たな国際環境の下で、東アジアの平和と安定を如何に保っていき、また世界の既存の秩序やルールを大切にしながら、如何に現実に即した世界の秩序の形成に日本が貢献できるのかということが大きな課題になってきています。もしいま大平首相が首相、外相でいらしたら、どのような外交をされたのでしょうか。とても関心のあるところです。

もちろん、目下、中国も順風満帆にしているわけではございません。国内にも大きな問題を抱え、外交に限定をしても課題山積です。アメリカや先進国からの圧力があり、ロシアとの関係に対しても、昨今、アメリカが中国の中小レベルの銀行のロシアとの取引に圧力をかけて、アメリカの決済網を使うなど言っています。また、ロシアのウクライナ侵攻については、特に欧米では、中国がロシアを支援しているからロシアが戦争できているという見方が強まっていますし、世界的に見ても、コロナとウクライナ前後で東南アジアを含め世界中の対中感情が悪化していて、中国にとっては大きなプレッシャーになっています。ただ、日本はコロナ前後で対中感情があまり変わっていない珍しい国です。原因は明確で、コロナ以前から対中感情が悪すぎるので、これ以上悪くならないのです。

さらに、中国が抱える新たな問題は、「グローバルサウス」と呼ばれる国々からの反発です。インドは昨年1月に開催したグローバルサウス・サミットに、中国を呼びませんでし

た。中国としてはアメリカに追いつき追い越そうとしているのに、後ろからインドが来たわけです。中国としては発展途上国の代表として先進国に対峙したかったのに、インドからその途上国の枠組みから外されてしまったわけです。これも非常に大きな衝撃でした。中国は、もともと「グローバルサウス」という言葉はアメリカが使っているため、一切使わなかったのですが、昨年7月になって王毅が突然「グローバルサウス」を「」付きで使い始め、外交部のスポークスマンがご丁寧に中国にとっての「グローバルサウス」の定義は途上国、新興国全体を指し、中国は自ずからグローバルサウスの一員だと説明したわけです。そして、そのあとに習近平が使うようになりました。中国もまた外交政策、それを説明する言葉の調整を行っているのです。

このように中国自身も決して順風満帆とは言い難く、彼らは彼らで一生懸命状況に適応しようとしているわけです。よって、当面は、米中間で長い、タフなコンペティションが続くだろうと思います。その競争も、ある領域において激しく、ある領域では、例えば核保有などはそうかもしれませんが、米中が共同歩調をとることもありましょう。日本はアジアにおいて、日米安保を大事にしながら、引越すことはできない中国と共に東アジアにおいて如何に共存し、この地域の平和と安定を保っていくのか。これこそが最大の課題であり、だからこそ中国に対しては抑止力を高めながら、中国との対話を重視し、事態のエスカレーションや連鎖を防ぐ努力をしなければならなくなりますし、他方で、世界的各地で「アメリカにつくのか、中国につくのか」などと踏み絵を迫るようなことをせず、相手に即した、まさに大平外相・首相がやられたような、相手に応じた、現実的な外交を展開していくこと、それがいま現在求められていることだと思います。ありがとうございます。

---

## 香川県立観音寺第一高等学校・ 小山圭二校長のご挨拶

本日は贈呈式の開催、誠におめでとうございます。先ほどご紹介いただきました香川県立観音寺第一高等学校の校長小山圭二でございます。今から約百年前の1923年に本校の前身である香川県立三豊中学校に入学された大平正芳先生の偉業を継承するとともに、優れた取組をした生徒を顕彰するために、2年前より大平正芳記念財団様から「大平賞」をいただいております。そのことについて少しお時間を頂戴してお話しさせていただきます。

「大平賞」は、私が赴任する前年度に財団様と土井前校長を中心とする先生方でお話しされ、スーパーサイエンスハイスクール指定校である本校が力をいれる探究活動の充実・発展を目的に設けることとなりました。私が赴任してから、校内での表彰規程を定め、既に2回優れた研究成果を収めたグループを顕彰しました。表彰は卒業式の前日の表彰式で行い、立派な賞状と副賞を渡すことができております。財団様をお願いして、副賞である置時計には「究理居情」と書かれたプレートを付けていただいております。これは本校の校長室に飾られている大平先生の書に由来するものです。

1回目の受賞は、「ハエトリソウの閉合期間とタンパク源含有率の関係」をテーマに研究をした3名となりました。地元新聞にも大きく掲載され、インタビューでは「総理大臣になられた大平正芳先生の名誉ある賞をいただくことができ、うれしく思う。受賞を励みにしたい。」などと喜びを語りました。2回目の受賞は、「アブラムシは青色の光を避けるのか」をテーマに研究した3名となりました。昨年度も地元紙に大きく報道され、生徒は「力を合わせてやり遂げたことがたたえられ嬉しい。」「高校の偉大な先輩の名前の

# 大平正芳記念賞 学術研究助成費



ついた賞を頂けて光栄」と語り、本校の庭にある大平先生の胸像の前で撮られた写真と共に掲載されました。

答えがある問いを勉強することは、進路実現のため、また問いを立てるために必要だとは思いますが、決してそれだけではいけないと思っています。グループで協働しながら問いを立てて、調べ方を考えて、考察して、まとめて発表する探究活動をこれからも推進してまいりたいと考えておりますので、今後ともご支援いただけると幸いに存じます。ありがとうございます。

## 受賞の言葉

〔大平正芳記念賞〕



受賞作

『国際法を編む—国際連盟の法典化事業と日本』

たかはし りきや  
**高橋 力也**

(横浜市立大学国際教養学部准教授)

このたびは栄えある大平正芳記念賞を賜り、大変光栄に存じます。審査をしていただいた選定委員会の先生方をはじめ、大平正芳記念財団の関係者の皆様には心より御礼を申し上げます。また、私を研究者の道へと導いてくださった指導教官の篠原初枝先生や、この本を世に出してくださった名古屋大学出版会の皆様にもこの場を借りて深謝申し上げます。誠にありがとうございました。

今回受賞作として取り上げていただいた拙著『国際法を編む』は、1920年代に国際連盟が実施した国際法の法典化事業に、当時の日本がどのような関わりをみせたのかを検討したものです。戦間期の日本は、国際社会の秩序構築には関心が薄かったといわれており、この定説は今後も簡単には揺るがないでしょう。他方で、この時代にあって、新たな外交様式として立ち現れた連盟における会議外交に希望を見出し、国際法の強化に熱心に取り組んだ安達峰一郎や松田道一のような外交官も現にいました。拙著では、彼らの法典化事業における活動を題材に、戦間期日本外交のもう一つの側面を明らかにすることを試みました。

このたびの受賞に際して、財団発行のパンフレット『硯滴考』の諸号に目を通し、大平元首相の思想に触れる機会に恵まれましたが、そこで見た「永遠の今」という言葉には、連盟外交に携わった安達や松田のことを思い起こさずにはいられませんでした。

安達らは、国際政治の冷厳な現実を度外視するような夢想主義者では決してありませんでした。これまでの国際関係史の歩みを振り返れば、連盟の設立が直ちに世界平和の実現に繋がるとは到底考えられない。それでもなお、連盟が国際法の法典化をもって何かを成そうとするならば、その未来に背を向けるのではなく、「今」日本が担うべき役割は何かを真剣に考え、実行に移す。雑駁に言えば、彼らにはそのような信念があったように思います。ここに、「過去のな引力を無視して未来をのみ志向する」のではなく、「未来に目を蔽い、過去にのみ執着する」のでもない、という大平元首相の「今」に対する姿勢とどこか共振するところがあるかもしれません。

大戦のはざまを生き抜いた彼らにとって、「今」とは何であったか。今回の賞を励みに今後より一層精進し、この点を引き続き突き詰めてまいりたいと思います。改めまして、このたびは誠にありがとうございました。

受賞作

『**辺境からの中国—黄海島嶼漁民の民族誌**』

おがた ひろみ  
**緒方 宏海**

(香川大学経済学部教授)

このたびは、名誉ある大平正芳記念賞を賜り、大変光栄に存じます。心より御礼を申し上げます。

ご存じのように、中国は総じて国民生活は改善されてきましたが、依然として農村と都市の経済格差が見られます。約 14 億人の中国において三分の一以上の人口を占める農民の生活向上は、現在も中国政府にとって重要な課題です。農村の抱えるこのような問題は、しばしば、研究やマスメディアで取り上げられてきました。しかし一方で、従来のマスメディアで取り上げられてきた経済的弱者の姿とは異なる実態が、一部の非・都市部に見られることにも着目すべきと考えました。そのような経緯で、現代中国の辺境離島における漁民の実態を、僥倖にも、このたび世に提示することができました。

鄧小平氏は、かつて、「一部の人、一部の地域が先に豊かになれ」という「先富論」を旗印に進めた「改革開放」路線により、経済的成功を収めました。拙著で扱った中国の黄海島嶼の漁民も、この「改革開放」路線の波に乗り、漁業と観光産業を発展させ、都市住民を超える収入を得ています。島の外部から様々な「圧力」もありますが、現在のところ、島民は、経済的成功を武器に、活力のある自律した社会を主体的に維持しています。ちなみに、この中国の黄海における離島の地域は、日本に近いにも拘わらず、学術的に長く注目されてこなかった地域でした。そこで、この地域の体系的な記録がなかったため、拙書では島の歴史と現在をも民族誌として詳述し、その上で、島の社会の変化と島民の相互行為の選択を事例分析から明らかにしております。

今後は、中国にこだわらず、瀬戸内海や香川県の離島の過疎化や漁業衰退といった課題解決にも、誠に微力ですが

貢献いたしたく、一層精進してまいります。

最後になりましたが、拙書の出版に際し、ご指導を賜りました先生方、ご助言下さった学友の方々に、深く感謝いたします。また、編集や出版にご尽力頂きました風響社の皆様に心から感謝申し上げます。

拙い研究を支えて下さった皆様に、今後も変わらぬご支援を賜りますようお願いし、謝辞に代えさせていただきます。

受賞作

『マレーシアに学ぶ経済発展戦略—「中所得国の罠」  
を克服するヒント』

くまがい さとる なかむら まさし  
熊谷 聡・中村 正志  
(日本貿易振興機構アジア経済研究所)

このたびは、大平正芳記念賞という歴史と伝統ある賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。大平正芳記念財団の関係者の皆様、時間を割いて審査をしていただきました委員の皆様にご心より感謝いたします。

本書は、マレーシアの過去 50 年にわたる経済発展の軌跡を政治・経済両面から分析し、「中所得国の罠」を脱するためのヒントを導き出そうと試みたものです。これまで、経済発展の模範は東アジアの国々、特に日本や韓国などでした。こうした国は「奇跡」とも称されるような超高度成長を長期間にわたって続け、一気に高所得国入りしました。ただ、こうした国々は人種的・言語的な等質性が著しく高いなど、世界的に見ると特異な国で、多くの国にとってはその経験に学ぶことは容易ではありませんでした。

その点、マレーシアはマレー系、華人系、インド系という主要 3 民族が暮らす多民族国家であり、半導体の主要生産国であると同時に石油や天然ガス、パーム油など一次産

---

品も産出する多様な性格を持った国です。世界的に見ると「標準的な国」に近いマレーシアが、ゆっくりではあるが着実な経済発展を遂げ、高所得国入り直前までたどり着いた姿からは、他の途上国が学ぶことができる教訓を多く導き出せるのではないかと。そんな思いで本書を書き上げました。

本書の大きな特徴は、政治と経済の研究者が協力して一国の経済発展を総合的に分析した点にあります。これまで「中所得国の罠」の議論では、人材の不足、未熟な中小企業、インフラの未整備などがその要因としてあげられることが多かったのですが、こうした問題はそれに取り組む政治的な体制や意思があってはじめて解決できるものです。その点で、マレーシアが経済発展段階ごとに直面する異なる政策課題に、政治的な改革を伴いながら対応していく姿は非常に印象的なものでした。

本書はいくつかの偶然とご縁、多くの方々のご協力・ご指導のもとにはじめて生まれたものと考えております。また、あらためて過去の受賞作と受賞者の皆様のお名前を拝見しますと、賞の重みに身の引き締まる思いがいたします。これを励みに、引き続き発展途上国の政治・経済の研究に取り組んで参ります。

---

受賞作

『国王奉迎のタイ現代史—  
プーミポンの行幸とその映画』

さくらだ ちえ  
櫻田 智恵

(上智大学総合グローバル学部総合グローバル学科助教)

このたびは、栄誉ある大平正芳記念賞を受賞し、大変光栄に存じます。財団関係者の方々、および選考委員の先生方に、深甚なる感謝を申し上げます。また、本書の刊行ま

でにさまざまな形でご尽力くださった方々に、厚くお礼申し上げます。

本書は、東南アジアのタイにおける君主制をテーマとしております。2016年に崩御するまで70年間にわたってタイ国王の座にあった前国王プーミポンは、政治や経済だけでなく、民衆の生活にわたるまで広く、強い影響力を持ちました。前国王がなぜ絶大な権威を形成・維持できたのかについては、「国民からの敬愛」が鍵になっていることが度々指摘されながらも、不敬罪の存在などを理由にほとんど研究がなされてきませんでした。

本書では、プーミポン前国王が実際に民衆からの敬愛を集めていたかどうかではなく、「民衆は国王を尊崇しなければならぬ」「プーミポン国王は素晴らしい人物であり、国王である」という神話とも呼べるような強固な社会規範が出来上がっていく様相を明らかにするため、特に地方行幸と「国王の映画」と呼ばれたニュース映画の拡散とに着目して分析を行いました。一次資料からの詳述にこだわり、1950年代から1970年代にかけての人々が国王をどのように見ていたのか、当時の社会はどんな様子だったのかなどを読者の皆様に具体的にイメージしてもえたらいいという思いで執筆いたしました。実現できたかどうかは読者の皆様の判断にお任せすることになるかとは思いますが、資料性という意味では一定の貢献ができたのではないかと自負しております。

タイでは2000年代後半から続く政治対立において王室が一つのシンボルになっていることなどから、以前とは違う意味でも王室に注目が集まっています。特に2019年以降は、それまでタブーだった民衆からの王室批判が真っ向から展開されるようになり、タイ王室は転換点を迎えています。同時に、日本や世界に目を転ざると、現代における各国の君主制の存在意義、そして民衆との関係性のあり方も問い直されているように思われます。本書が、タイの事例にとどまらず、現代君主制をみる上での何らかの視点を

---

提供できていれば幸いです。

---

受賞作

『冷戦終焉期の日米関係—分化する総合安全保障』

やまぐち わたる

山口 航

(帝京大学法学部専任講師)

この度は名誉ある大平正芳記念賞を賜りましたことを、厚く御礼申し上げます。これまで錚々たる先生方が本賞を受賞されており、その末席に加えていただいたことを、大変光栄に存じます。ご推薦くださった先生方や選考委員の先生方をはじめ、関係者の方々、本書の執筆にお力添えをいただいた方々に感謝申し上げます。

受賞対象となりました拙著『冷戦終焉期の日米関係—分化する総合安全保障』(吉川弘文館、2023年)は、総合安全保障という概念を軸に、冷戦終焉期の日米関係を論じたものです。そして、大平正芳首相こそ、首相就任以前から総合安全保障を提唱された人物であり、さらに首相としても総合安全保障研究グループを立ち上げ、議論を深められました。こうした点を考察した本書が、大平首相のお名前を冠した賞を賜わり、大変感慨深く感じております。

一般的に総合安全保障は、「狭義の安全保障」たる軍事安全保障のみならず、「広義の安全保障」たる経済安全保障や食糧安全保障などを合わせたものである、と理解されています。しかしながら、大平首相が提示したのは、そうした安全保障の「多様性」だけではありませんでした。自力で自国を守るという自助のレベルだけを考えるのではなく、同盟関係のレベルや国際環境のレベルから多層的に安全保障を捉える、という点においても総合的であったのです。いわば安全保障の「多層性」です。拙著では、安全保障の「多層性」

と「多様性」両方の観点を組み合わせて、冷戦終焉期の日米関係を論じました。今日でもしばしば用いられる、総合安全保障という概念の理解を深めることに貢献できたとすれば幸いに存じます。

この賞の名に恥じぬよう、精進して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

---

## 〔学術研究助成費〕

個人研究

### 『アジア太平洋地域におけるインクルーシブな安全保障共同体の構築—フェミニスト平和運動のトランスローカルな連帯実践の事例から』

かげやま ゆうか  
影山 優華

(同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程)

この度は、名誉ある第38回「環太平洋学術研究助成」に採択いただき、大変光栄に存じます。大平知範理事長をはじめ、大平正芳記念財団の関係者の皆さま、選定委員の先生方、日頃から研究活動を支えてくださる皆さまに心より感謝申し上げます。

今日の社会では、格差や貧困、紛争、気候災害、パンデミックなど、個人の生活を脅かす国境を越えた課題への対応が求められています。一方で、国家間の対立や軍事的脅威が強調されています。このような状況下で安全保障を考える際には、大平正芳元首相が提唱された「地球社会」という、私たち誰もが一つのコミュニティを共有する相互依存した存在で

---

あるとの認識がより一層重要性を増しているように思われます。

今回選定いただいた研究は、生命のウェルビーイングや、尊厳の尊重を中心に据えた安全保障の実現に向けて活動するフェミニスト平和運動に焦点を当てています。研究対象である「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク (IWNAM)」は、沖縄、韓国、フィリピン、米国本土、日本本土、プエルト・リコ、グアム、ハワイの運動家・研究者による国境を越えた運動を展開しています。IWNAM は、米軍駐留地域の性暴力や環境破壊などの問題に取り組む経験を通して安全保障の再定義を行ってきました。

本研究では、国家間の政治的・経済的力関係、それらを反映するメンバーの間の差異や力関係にも留意しつつ、地域コミュニティ間の平等な関係構築を目指す IWNAM のトランスローカルな連帯実践を明らかにします。これによって、国家中心・軍事偏重・男性主導の伝統的安全保障に代わる、新たな安全保障の視座を提示することを目指します。

本研究が「安全保障」をアジア太平洋地域・地球規模の問題として捉え直し、人々が共存共栄できるインクルーシブな共同体の創出に寄与できれば幸いです。

本研究を進めるにあたり、お力添えをいただくことに深く感謝を申し上げますとともに、研究活動に精進する決意をいたします。

●贈呈式及び記念パーティ（ホテル・グランドヒル市ヶ谷）



財団合同役員会



小山圭二様、清水茂昭様

# 大平正芳記念賞 学術研究助成費



平将明様の挨拶と乾杯



渡辺満子様、櫻田智恵様、  
柳川邦衛様



受賞者の皆様



三木信吾様、高橋力也様、  
未廣昭様、川島真様



松村克史様、井川茂樹様、大平知範理事長、  
清水範男様、大鶴義丹様



大久保龍也様、岡修平様、  
西村みゆき様、佐藤義行様



鈴木正明様、井川茂樹様、大平裕様、高橋俊夫様



渡辺満子様、平将明様、王星宁様、國金栄江様



柳川邦衛様、上野誠様、櫻田智恵様、大平裕様



海野剛様、鈴木崇様、海野光司様、大平知範理事長、鈴木崇嗣様



中央・鈴木岩男様、四国記念館運営委員のみなさま

第40回 大平正芳記念賞 贈呈  
第38回 学術研究助成費



岡田裕志様、大平知範理事長、小山圭二様



松村克史様、堤恒一郎様、早乙女立雄様



湯下滋央様、大平知範理事長

## 風信・来信

●井上寿一先生（学習院大学教授）が公明新聞8月5日に『大平正芳の中国・東アジア外交』の書評を掲載

日中関係の悪化が高止まりしている。内閣府の「外交に関する世論調査」（本年1月発表）によれば、日中関係は「良好だと思ふ」5.6%に対して「良好だと思わない」90.1%である。他方で今後の日中関係の発展は「重要だと思ふ」68.2%対「重要だと思わない」27.8%となっている。しばしば例えられるように、日中関係は引越しができない関係である。日本とは異質な政治体制の国家が軍事大国化していても、その国との関係はなんとかしなければならぬ。

どうすべきか。歴史に手がかりを求めて考える。そうすると大平正芳の外交にたどり着く。大平の政治的な個性は、多くの人を魅了し続けている。いくつもの評伝がある。このような状況のなかで、本書の刊行の意義は何か。大平外交の理念の魅力、あるいは価値観外交としての大平外交を高く評価することで、かえって外交政策の実像が見失われがちなのではないか。

対する本書は、「大平の政治思想から彼の外交政策を演繹的に説明するのではなく、大平が実際に直面した外交政策を、原文書に基づいて分析する」。

たしかに日本はもとより近隣諸国の史料を博捜している。13人の分担執筆の形式ながら、全体としてマルチ・アーカイヴァルな手法による著作であることがわかる。以下では500頁に及ぶ大著を三つの視角から再構成してその要点を記す。

第一に経済外交としての大平外交は、国際秩序を支えるアメリカとの協調関係をとおして、国益を追求するリアリズム外交のことだった。

第二に地域主義外交としての大平外交は、伝統的なアジア主義外交ではなく、環太平洋連帯構想がそうであるように、グローバリズムと地域主義の両立をめざした。

第三に対社会主義国外交としての大平外交は、「親中・反ソ」に傾きがちになりながらも、「反ソ」一辺倒になることがなく、対中・対ソの間でバランスをとろうとした。

以上の特徴を持つ大平外交は、実際にはどのような成果を上げたのか。

大平の経済外交は、その成果を誇るべき東京サミットにおいて、



アメリカに「裏切られ」る。石油輸入量の目標値の設定は、欧米諸国間で調整された。日本は「蚊帳の外」だった。大平は「烈火の如く怒った」という。大平の地域主義外交の環太平洋連帯構想も、官邸主導だったことで外務省に警戒され、進捗しなかった。「防衛的」で「軽率なことをする国ではない」との大平の対ソ認識は、ソ連のアフガニスタン侵攻によって崩れかけた。

それでも大平外交は振り返るに値する。不安定な国内政治のアメリカとの同盟関係の強化をとおして、リベラルな国際秩序を支えながら、環太平洋の新興国が台頭している今こそ大平構想の実現を図り、ウクライナ侵攻を続けるロシアに対して、現実主義的な外交を展開すべきだからである。

今日の日本外交は、未完に終わった大平外交の理念の継承とその政策の発展に努めなければならない。

#### ●大平賞受賞・緒方香川大学教授、 四国新聞7月3日に紹介される

大平正芳記念財団（大平知範理事長）の第40回大平正芳記念賞に、「辺境からの中国—黄海島嶼漁民の民族誌」を著した香川大経済学部の緒方宏海教授らが決まり、このほど東京都内で贈呈式が行われた。



記念財団は観音寺市出身の大平元首相の事績を顕彰し、提唱した「環太平洋連帯構想」の推進と思想の普及に寄与しようと1985年に設立。環太平洋地域の政治や文化などに関する優れた著作や研究に対し、元首相の命日に合わせて記念賞を贈っている。

贈呈式では大平理事長が「40回の節目を迎えられたのは多くの支援のたまもので、記念賞は学会への登竜門的役割を果たしてきた」などとあいさつ。受賞者に一記念の楯を手渡した。

緒方さんの著作は195の島々からなり、18の有人島に7万人弱が暮らす国境の島から、巨大な中国を俯瞰する意欲的な点が高く評価された。受賞後、緒方さんは「10年間の中国での研究成果を今後は香川の離島振興にも生かしたい」と抱負を述べた。

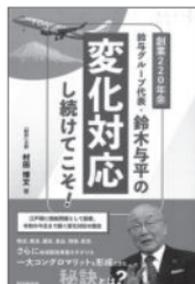
今回は他にマレーシアの経済発展戦略について論述した日本貿易振興機構アジア経済研究所主任調査研究員の熊谷聡さんと同研究所地域研究センター長の中村正志さんの共著など、5人の4著作にも贈られた。同時に行っている第38回環太平洋学術研究助成費の対象者には、同志社大グローバル・スタディーズ研究科の景山優華さんが選ばれた。

贈呈式には観音寺市からの参加もあり、元首相の母校・観音寺一高

の小山圭二校長が記念財団と共に「大平賞」を創設し、昨年から探究活動などで優れた成果を上げた生徒に贈っていることを報告した。

●『鈴木与平の「変化対応」し続けてこそ！』財界研究所、2024年

江戸期より廻船問屋として創業220年の鈴木与平グループ代表の鈴木与平氏の経営判断は令和の今日まで続く変化対応の歴史である。物流、建設、食品、航空、情報、教育と地域と共に生き、グローバル市場へ、一大コングロマリットを形成した。その秘訣にせまる。(鈴木与平氏は当財団理事)



●渡辺利夫監修、拓殖大学アジア情報センター編『東アジア長期経済統計』勁草書房2024年

アジア諸国の政治的独立以来のこの半世紀に及ぶ統計を細大漏らさず収集し、欠落部分を推計し、かつ各国の統計を相互に比較可能な形で提示。学術書、ジャーナリズムの知的関心に応える経済・社会統計の初の画期的統計集。全12巻別巻3。(渡辺利夫：大平正芳記念賞前運営選定委員長)



●王星宇博士(中国人民大学) 8月1日(木)大平正芳記念館を訪問

外務省からの要請があり、王星宇博士と國金栄江様(外務省中国・モンゴル第一課補佐)が大平記念館を訪問されました。

王星宇博士は新潟大学に留学。昨年の9月から一年契約で新潟大学に講師として赴任、同大学で中国語や中国の歴史等の講座を担当されました。今回任期一年を終えて、9月3日の帰国の前に、母国が最も大切にされている大平正芳先生のゆかりの地を訪ねることになったとのこと。



●大平正芳記念財団へのご寄附者名

【100万円】三木証券(株)(鈴木崇様)、【60万円】田中義久様、【50万円】鈴木岩男様、(株)タカ・コーポレーション(馬淵喬様)、【15万円】北野谷惇様、【10万円】小泉達也様、(株)オール星光(武藤清様)、かんべ土地建物(株)(神戸雄一郎様)、橋本商工(株)(橋本豊重様)、早川運輸(株)(早川正雄様)、この他220名の個人・団体の方々より御芳志をいただきました(順不同、2023年9月～2024年8月)



「大平正芳記念財団レポート」第42号  
発行・公益財団法人大平正芳記念財団  
発行人・大平 知範

2024（令和6）年9月発行

〒102-0082 東京都千代田区一番町 22-4 一番町館 202号  
電話 (03) 3230 - 2213 FAX. (03) 3230 - 2214  
URL : <https://www.ohira.org/>

THE MASAYOSHI OHIRA MEMORIAL FOUNDATION

Ichibanchokan,202  
22-4, Ichibancho, Chiyoda-Ku, Tokyo,  
102-0082 JAPAN

Tel. +81 (Japan) 3-3230-2213

Fax. +81 (Japan) 3-3230-2214

URL:<https://www.ohira.org/>

